

実践報告

「三重大学日韓学生協働学習プログラム」の実施について

松 岡 知津子

Mie University Collaborative Learning Program for Japanese and Korean Students

MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This report is about the activity “Mie University Collaborative Learning Program for Japanese and Korean Students” of the SSSV Program, which was held for 10 days in February 2012. Until now, our university has received Korean students, but has not sent any to Korea. Under these circumstances, we intend to rethink the Japanese-Korean cooperation, and plan all details of this Program, from the preparatory stage and up to the actual implementation.

キーワード：三重大学生、東国大学慶州キャンパス、SSSV、協働学習

1. はじめに

本実践報告は、平成 24 年度の SSSV（ショートステイ・ショートビジットプログラム）における SV（ショートビジット）で実施した「三重大学日韓学生協働学習プログラム」（以下、日韓学生プログラムとする）の企画から実施までを報告するものである¹。

これまで、本学の交流協定校である東国大学校から交換留学生として毎年数名の留学生を受け入れているが、本学から同大学への学生派遣の実績はない。そこで、今後のより一層の交流を目指し、短期プログラムによって本学学生の韓国語・韓国文化への理解を深めていくこと、それと同時に、本学への留学を希望する韓国人学生に、事前に本学についての理解を深めてもらうため、本プログラムを実施することとした。

渡航中はもちろんのこと、渡航前の事前研修の段階から日韓学生による協働学習が行われた。本稿では、その準備段階から実施に至るまでを詳細に記す。以下では、まず本プログラムの目的および特徴、その測定方法などについて記す。そして、2. では、学生の募集から決定までについて記す。次に、3. では、事前研修会の実施について触れ、4. で実際のプログラムについて記す。最後に、まとめを行なう。

まず、本プログラムの目的を以下に述べる。

1. 参加学生が韓国社会・文化等に関する課題を設定し、韓国在住の韓国人学生との協働学習を通して問題解決すること。
2. 韓国の生活様式の一端を知り、韓国語で基本的な表現で挨拶やコミュニケーションが取れるようになること。

次に、本プログラムは以下のような点を特徴として挙げていた。

1. 各自が韓国社会・文化等に関する課題を設定し、韓国人学生との協働学習を通して問題解決すること。
2. 韓国の生活様式の一端を知り、基本的な表現で挨拶やコミュニケーションが取れるようになること。

これらは以下の方法によって測定するものとした。まず、1. の測定方法としては、参加者は、渡韓前に事前課題として疑問点・問題点について考えておく。そして、いかにしてそれらの問題を解決するか、事前オリエンテーションを通して準備する。プログラム中は、本学教員が現地担当者と協力してサポートし、成果発表会を行う。帰国後、成果をレポートとして提出する。次に、2. の測定方法としては、韓国人日本語学習者との協働学習において、プログラム中に成果発表会を行い、本学教員および東国大学校担当者が評価する。また、協働学習中は、引率者が適宜サポートしつつ学習過程を確認する。

また、プログラム全体の学習成果として、三重大学の全授業で実施している「学びの振り返りシート」を用いて、プログラム参加者の成長度合いの評価を行う。三重大学の教育目標である「4つの力」に加えて、本プログラムの目標に関わる項目について調査を実施した。

2. 採択から学生の決定まで

募集は、ポスターの掲示等で行った。募集期間はおよそ1か月であった。SVに採択されてからの掲示となったため、募集期間は短かったが、参加者に一律8万円の奨学金が支給されるということもあり、多数の応募者があった。そこで、三重大学国際交流チーム国際交流コーディネーターと引率教員とで面接を行った。面接では、1. 韓国語能力について、2. 韓国社会・韓国文化等に対する考えや知識について、3. プログラム参加への意欲、4. 協調性の有無について5段階で評価を行い、総合点の高いものから合格とした。

面接の結果、三重大学学部生7名、大学院生(修士課程)1名の合計8名が選ばれた。内訳は、教育学部(教育学研究科)2名、医学部2名、人文学部4名である。学部、大学院等の制限は設けなかった。学年は、学部2年生から修士課程1年までと幅広く、また、社会人として入学した学生もいた。中には、韓国への渡航歴が複数回ある者と、初めてで

ある者がいた。合否の連絡はメールで行った。合格者へは、顔合わせおよびオリエンテーションの案内とともに、以下の準備をするようにメールで指示した。

1. 韓国語教材の購入
2. ハングルの練習
3. 後期時間割を引率教員にメール送付
4. 事前研修の発表テーマの検討
5. エッセイの提出

まず、1. 教材については、参加者が全員日本人学生であったため、日本で出版された基礎的な教材を指定した。韓国語力はそれぞれ異なっていたため、教材の購入は任意とした。次に、2. は、面接の結果、韓国の文字が韓国に理解できない者もいたため、オリエンテーションまでに各自で練習してくるという課題を課した。3. 時間割の送付については、事前研修の日程を定めるために課した。本プログラムは、正規の授業ではないため、参加者全員の都合のつく時間帯を選ぶ必要があった。4. 事前研修の発表テーマの検討とは、プログラム実施までに毎月行われる事前研修会において、担当者を決め、韓国事情等について発表を行うものである。発表と質疑応答を通して、韓国に対する知識を深めることを目的とするもので、そのテーマを事前に1人5つ考えてくるように指示した（例：韓国の教育事情について、韓国の軍隊の制度についてなど）。5. エッセイでは、本プログラムで挑戦したいこと、そのために必要なことをA4用紙1枚以内で提出してもらった。これは、最初の顔合わせまでに提出することとした。

3. 事前研修会の実施

SV実施に先立ち、9月から2月までの半年間、月に1度およそ90分（1コマ分）の事前研修会を行った。

毎回の事前研修会の目的は、1. 韓国語を学習すること、2. 韓国社会・韓国文化についての知識を深めることであった。韓国語学習は、毎回30分程度行った。まず、事前にメールリングリストで指定していた課題をテストによって確認した。そして、韓国人留学生アシスタントによる解説と練習を通して、韓国語能力の向上を目指した。ハングルは、初回の研修までに各自ある程度読めるようになってはいたが、やはり日本語母語話者特有の発音の問題等が見られたため、留学生アシスタント複数名が個別に指導してくれたことは大変ありがたかった。テストの後も、基本的な表現の練習や、韓国語に関する質問の時間を設け、各自のレベルに合った韓国語学習を行った。

次に、テーマを定めて行う発表は、初回の研修会において全員でテーマを決定し、発表

担当者を決めた。決まったテーマは以下の通りである。

10月19日：①日韓の少子化問題、②韓国の経済（企業）

11月16日：①日韓の教育制度・学歴、②歴史的・文化的遺産

12月21日：①韓国の食文化、②日韓の男女・家族関係

1月18日：①韓国の美容整形文化、②日韓の国民性・愛国心

2月15日：①韓国の兵役制度、②韓国の芸能・スポーツ界

これらは、学生たちが事前に選んできたテーマの中から多数決で決めたもので、関連するテーマをまとめるなどして決定した。全部で10テーマあるが、1テーマあたり2、3人が担当するようにし、1人が複数のテーマを担当することとした。発表時間は30分程度とし、発表はパワーポイントと配布資料を用いて行った。事前に、引率教員のチェックを受けてから、発表することとした。発表後、質疑応答および議論の時間を設けた。また、発表者から韓国人留学生に対して、発表内容に関して個人的な意見を求めることもあり、参加者は、韓国についての知識を深めていくことができた。

さらに、韓国語学習の集大成として、また、協定大学の学生に三重大学と三重県、またその周辺県についてより深く知ってもらえるように、韓国語による紹介パワーポイントを準備した。発表は、2人が1組となって10分で行うこととし、1. 韓国語による自己紹介をすること、2. それぞれが担当するテーマについて、韓国語で発表することを義務付けた。韓国語による発表のテーマは、参加学生と引率教員で話し合いの上、決定した。発表テーマは以下のとおりである。

1. 三重大学の紹介
2. 三重県の紹介
3. 三重の食べ物の紹介
4. 三重県周辺の紹介

パワーポイントの準備は三重大学在学中の韓国人留学生による積極的なサポートにより、出発までに大半が完成していた。毎回の韓国語の練習に加え、この発表を追加したことで、参加者の韓国語学習意欲もさらに増したように見受けられた。また、上記のとおり、出発前の段階ですでに、日本人学生同士の交流、また、日本人学生と韓国人留学生の間で交流が生まれており、相互理解が進んだのは大変喜ばしいことであった。

4. SVの実施

本節では、2012年2月20日から29日までの10日間行われたSVについて記していく。まず、本プログラムの日程を以下の通りに示す。

日 程	内 容	備 考
2月20日(月)	中部国際空港 航空会社カウンター付近集合。 各自搭乗し、入国審査直前に再集合。 釜山到着後、リムジンバスにて釜山駅へ移動。 【オリエンテーション】	移動日
2月21日(火)	【釜山の概要を学ぶ】 ◆レポートの提出1	
2月22日(水)	午前【韓国語・韓国事情講義】 午後【韓国の大学生との討論会】(日・韓国語) ◆レポートの提出2	
2月23日(木)	午前【釜山市立博物館見学】 午後【韓国語・韓国事情演習】	
2月24日(金)	午前【日韓国際交流セミナー】(三重大副学長) 午後【東国大学生との対面式】	協定大学との協働学習
2月25日(土)	【東国大生との協働学習(1)】 ◆レポートの提出3	協定大学との協働学習
2月26日(日)	【東国大生との協働学習(2)】 ◆レポートの提出4	協定大学との協働学習
2月27日(月)	午前【成果発表会・修了式準備】 午後【東国大生との協働学習(3) 成果発表会】	協定大学との協働学習
2月28日(火)	【研修総括】 ◆大学提出用レポートの作成(帰国後回収)	
2月29日(水)	帰国後、空港にて解散	移動日

初日である2月20日は、ホテルに到着後、オリエンテーションを行った。オリエンテーションの内容は、主に今後の日程についての確認と、交通事情等に関する説明であった。釜山滞在中は地下鉄やバスを多く利用するため、交通カードの購入を行ったり、韓国独特の交通システムについて説明したりするなどした。

2月21日から23日までは、協定大学との協働学習に向けた準備段階として、釜山の概要を学んだり、韓国語・韓国事情の講義を受けたりした。講義および演習は、韓国の大学に勤務する日本人教員2名および韓国人教員1名、そして韓国人アシスタント2名が担当した。韓国語の授業では、24日の対面式に韓国語で行う自己紹介と三重大、三重県等の紹介の練習を行った。

2月24日から27日までは、協定大学である東国大学慶州キャンパスの学生との協働学習を行った。対面式や成果発表会などを除いては、基本的には三重大学生1名につき東国大学生1名のペアで行動した。協働学習の際には、事前研修の発表やエッセイ、その他こ

れまでの準備で獲得してきた知識や自分たちなりの韓国についての印象、考えを確認していく作業を行った。三重大生と東国大生がペアでテーマを設定し、問題解決を行うべく、ともに行動した。その際に必要となった費用は、SSSVの奨学金から一律徴収したもので使用した。三重大生の韓国語のレベルと東国大生の日本語のレベルを比べると、はるかに東国大生の日本語レベルのほうが高かったが、三重大生にとって韓国語の練習も今回のプログラムの大きな目標の1つであることを伝え、できる限り韓国語を使用してもらうようにした。

成果発表会を行った後、研修の総括として28日に三重大生および引率教員だけで研修の振り返りを行った。これまでの準備および協働学習を通して感じたこと、学んだこと、反省点などをグループに分かれて共有した後、全体で発表した。その際には、これまでに提出していたレポートを一旦返却し、読み返す作業を行った。総括では、韓国に対して過去に自分が持っていたイメージや研修に参加してからの考え方の変化、交流した韓国国学生に対する意見などを共有した。参加学生の中には、初めて韓国を訪問した者もいれば、観光旅行をしたことがある者もいたが、今回のような同じ目線の学生としての交流はどの学生も初めてであった。どの参加者も、隣国の同世代の学生が、かなり上手に日本語を操っている様子に驚き、刺激を受けたようであった。研修中から連絡先を交換するなどして、すでに各自で交流が始まっていた。

5. まとめと今後の課題

本プログラムの最終日、総括後にさらに本学指定のレポートの作成、つまり本学のSSSV採択プログラムが共通して行う「学習成果に関するレポート」の作成を行った。学籍番号、氏名、所属などのほかに、以下の点について問うものであった。

- A. 今回の留学を通して、留学、学習、国際理解に対する意欲は、参加前に比べてどのように変化しましたか。
- B. 今回の留学に参加して、次の留学への関心は高まりましたか。
- C. 今回の留学に参加して、三重大学の教育目標である4つの力の中の主体的学習力は、成長しましたか。
- D. 今回の留学に参加して、三重大学の教育目標である4つの力の中の課題探求力は、成長しましたか。
- E. 今回の留学に参加して、本プログラムの教育目標である以下の目標は、どの程度達成しましたか。

プログラム目標1. 韓国語でコミュニケーションが取れるようになる

プログラム目標 2. 韓国社会・韓国文化への理解が深まる

A. から E. の問いに対しては 5 段階評価で答えてもらった。さらに具体的な内容については記述してもらった。参加者全員が国際理解に対する意欲が強くなり、留学への関心が高まったと答えた。韓国語によるコミュニケーションに関しては、総じて目的を達成したと答えたが、韓国の学生に比べるとまだまだ足りないと感じたようであった。

本プログラムの参加により、学生たちは目に見えた成長が見られた。学部や年齢の壁も越えて、全員が協力してプログラムを進めることができたのは、引率教員としても、嬉しい思いであった。参加者全員の高い意識と協力により、大きなトラブルに見舞われることもなく無事に帰国できたことを嬉しく思う。

プログラム終了後も、本学に留学している韓国人留学生と交流するなど、本プログラムがきっかけとなって新たな動きが見られた。今後もますます日韓の学生交流が進むよう、さまざまな場を提供していきたい。

注

1. SSSV とは日本の大学、大学院、短期大学、高等専門学校第 4 年次以上（専攻科含む）、専修学校（専門課程）が実施する 3 か月未満の留学生受入れ、または 3 か月未満の学生派遣のプログラムに参加する学生を対象とした奨学金であるが、平成 24 年度をもって廃止された。また、SV とは、その中でも日本の大学、大学院、短期大学、高等専門学校（専攻科を含む。なお第 2 年次以下を対象とするものを除く。）又は専修学校（専門課程）が、諸外国の高等教育機関との学生交流に関する協定等に基づいて、8 日以上 1 年以内、当該大学等に在籍する学生を派遣するプログラムを実施する場合、そのプログラムを支援する制度である。